

Title	廣田律子 『鬼の来た道』
Sub Title	
Author	野村, 伸一(Nomura, Shinichi)
Publisher	三田史学会
Publication year	1998
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.67, No.2 (1998. 3) ,p.149(349)- 153(353)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19980300-0149

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

廣田律子『鬼の来た道』 玉川大学出版部、一九九七年

野村伸一

本書は中国江西省、貴州省の儺戲の現場で見たものを中心に述べつつ、なお近年に出版された内外の儺戲関係の書を広く引用し、最後にいくらか性急に日本の鬼の図像的解明へと目を転じたものである。

全体が、1. 鬼の来た道 2. 来訪する神々 3. 神々の素性 4. 神と人の交流 5. 祭りの秘義の5章に分けられている。ただ各章は必ずしも連関せず、またそれぞれの章のなかに独立したものがある。内容からいって2章から5章が中心で、そこではさまざまなのが記述されている。そして1章はそのなかからとくに鬼の図像を取り上げ日中の比較を試みたものである。

本書の内容に触れる前に、まず「儺戲」という語が使われだした背景を整理しておきたい。

儺戲とは中国古代の宮廷でおこなわれた儺礼が伝承さ

れていく過程で、演戲的な面が肥大していったことから用いられた語である。日本ではあまり使わないが、朝鮮では中国と同じように儺礼の変容が著しくこの儺戲という語を用いることも多い。

ところで、今から一〇年ほど前、すなわち一九八〇年代の後半から中国南部の少数民族に伝わるカミゴトが「儺戲」「儺堂戲」の名のもとに脚光を浴びだした。それは民間の宗教者がムラ人の依頼を受けておこなう儀礼で跳神ともよばれるものだが、その際に特徴的なことは仮面を用いて身体演戲をくり広げることである。これを中国の研究者は「儺戲」ということばで概括した。おそらく宗教儀礼としては評価できないが、演劇の原初形態としては認めることができるという意味をこめてのことであろう。「中国儺戲学研究会」が作られると同時に、こ

の種のカミゴトを全国に探し求め、かなり広範囲に儺戯文化として取り上げ、併せて国際学術会議などの場で公開もした。そうしたことがかなり公的におこなわれるようになったのは中国政府の肝いりということもある。すなわち全国に散在する「儺戯」は、必ずしも「迷信」だけではないということ、むしろ外国からも注目されているのであり、それは中国古代の演戯文化の伝統を引き継ぐものとして積極的に公開するべきだという姿勢である。

中国では一九八六年に曲六乙氏の「建立儺戯学引言」を冒頭に据えた『儺戯論文選』が貴州民族出版社から出されている。このあたりから出発し、今日まで写真集などを含めるとおそらく二〇冊以上の儺戯関係著作が出版されているだろう。これに少し遅れて台湾の研究者が調査報告のかたちで儺戯を論じはじめ、その成果は一九九二年、九三年の『民俗曲芸』などに散見される。また日本では田仲一成氏の大部の著書をはじめ、長尾莊一郎、松岡正子・高山茂、諏訪春雄氏などの論著がこの数年のあいだに出されている。

こうしたなかで著者の廣田氏もまたかなり精力的に儺戯を追究し、後藤淑氏との共編で『中国少数民族の仮面

劇』（木耳社、一九九一年）を、また中国の学者との共編で『中国漢民族の仮面劇』（木耳社、一九九七年）をすでに上梓している。そこでは貴州省、江西省の研究者の論考が中心となっていたが、著者も儺戯の概説を書いている。前者の書に接したあと儺戯とはこういうものなのかという一種、新鮮な驚きがあり、評者なども貴州省の現地にでかけたものである。

さて、そのはじめの共著の執筆から数年、著者は「貴重な民俗資料を中国内外に紹介しなくては」という使命感を抱いて調査をつづけたとあとがきで述べている。おそらく本書の最大の特徴はそうした、いい意味の気負いの反映であろう。現地でみたもの、きいたものは何であれ詳細にノートに取り、それを細大洩らさず読者に伝えようとしているかのごとくである。

そのため、本書の大部分は、表題「鬼の来た道」から連想されるものとは違い、中国の農村祭祀「儺戯」の探究ノートといった内容である。それははじめは「中国の儺戯」をさまざまな角度からとらえようとしたものであったに違いなく、必ずしも鬼にこだわったものではない。それゆえ、1章の系統論のようなものにあえて全体を引きつけようとする無理が生じる。そのばあいには、

2章以下は「雑然としたもの」とされてしまいかねない。それよりはむしろ本書は2章にあるような、現実の正月行事の次第を中心にした記述に徹し、そこで、つまり江西省や貴州省のムラを離れずにゆっくりと考察を深めるべきであったかとおもう。

本書は儺戯の次第に関する資料集のようでもあり、儺戯を伝えた農村の生活調査のようでもあり、個々の仮面の名前を記した解説本のようにでもある。そうしたところに特色があるといったほうが素直な読み方なのだといえようか。

著者のかかげた問題意識は究極的には「鬼」の日中比較なのだろうが、そこにいきつくにはまだまだたいへんな道のりがある。たとえば、「4. 神と人の交流」の章で、祭儀の依頼者側の農地面積、栽培作物の収量、家畜の数などが報告されるかとおもうと、一方で、二四人の演じ手集団につき、その一人一人の名前と職業、地位の記述が記されるといった按配である。それならば、祭儀の担い手らの村落生活ということが主題となるのかとおもうと、そういうわけでもないのです、その位置については「芝居の役者のようなもので、地位が非常に低かった」と簡単に記すだけである。

なぜかれらは低かったのか。多かれ少なかれ、儺戯の担い手の社会的な地位は低かっただろうと予想はされるが、かれらの身分が低いということはかれらだけの問題ではなく、ムラ人の社会生活においても差別や不条理が頻繁に生じていたことを示唆している。儺戯はそうした環境で受け入れられていたのであり、儀礼の場における言語伝承に立ち入るなら、そこまで掘り下げてみるべきであろう。

著者は実によく調べる。呪文、願掛けの唱えごと、神招ぎのことばなども煩をいとわずに翻訳してくれる。それはやさしそうでいてかなり難解なことはいずれも同じであろう。ただ、それらのことばは通例、定形である。実際はそれらの定形のあいだに俗語がはいってくるのであり、そこをすくい取れるかどうかが問題となる。

こうした意味で提示された訳文を読むとき、いいかえるとムラ人が儺戯に際して抱いた思いはどのよう to 解決されていったのかという点になると少しもの足らなさが残る。それはほかでもない、ホンモノの儺戯が成立しているのかどうかということへの吟味がないことによる。同じムラ、同じ担い手によるものであっても、儺戯というのは、芝居と同じようなもので一回ごとに異なる性格

のものである。中国の農村では当局の統制もまだまだ多くの、祭儀の追真性にとつてもつともたいせつな依頼者側の表情ということが隠されることが多い。だいたい当局の発想は儺戯を演戯文化として公開させるというものであり、簡単にいうと「迷信」をなるべく除外したセットなのである。もちろん、セットされたものでも一々の次第を記録するとなると、容易ではない。さすがに著者はこの段階はかなりよく乗りこえている。つまり公開された儺戯についてはよく調べて書いている。

ただし著者本人の実見した儺戯がホンモノかどうかということにはあまりこだわりがない。そんなことにこだわっていたら、中国では調査がたちいなくなるということもある。ただ、公開の儺戯というのは、いつ、どこでみてもたいして変わりはないものである。そういう調査の積み重ねのせいなのかどうか、儺の祭儀の意味について著者は「祝福的性格と除災的性格」とか「穀物の出来具合、家畜、子授かり、病気について、占いによって神の意志を確かめることは、この祭りの大きな目的ともなっている」と記すことになる。このようないい方でもくれば、アジアの農村における正月のカミゴトはどこでも同じこと、たいへん簡単に片づいてしまう。しかし、

これはほとんどいわずもがなの前提であって、このていどの性格付けなら、はじめに一度だけ記せばよいのではなからうか。

肝心なのは祝福もかなわず、除災の実現せず、食べる物も底をつくような現実に直面したときの民衆的な対応の仕方、あるいはそうしたおぞましい過去への民俗的な想像力がいかに個々の儺戯に発揮されているかを追究することである。そこに現れてくるオニの相貌とそれへの人びとの希求こそがもつともわたしたちの関心を引くのではなからうか。だが中国でもつともむずかしいのはこの種の実地調査である。たとえばムラ人が身銭を切った依頼する真摯な病氣治しの儺戯はあるのだろうか。そうした儺戯はあるはずだと書いてある。しかし、わたしたちはまだたつたひとつの報告も読めないでいる。本書の著者はそうしたところへ探究の足を踏み入れる資質の持ち主だが、それはまだ本書には反映されていない。この点は課題としなければならぬだろう。これと同時に、版元の事情によるのか図版の大きさがあまりにも「節約」されすぎていて、数多くのオニが単なる証明写真になっってしまったのは残念である。

著者は中国のけっして便利とはいえないムラのなかに

ひとり飛びこんでいき、通訳なしで直接対話を重ねるだけの言語能力と活力を持っている。それは難解な儀礼のことばを果敢に翻訳しているところからもうかがわれる。これはこれで他者のまねのできない利点の發揮だが、根本のところでは何を問題としているのかがついに最後まで読みとれなかった。儼戯をやらなければならなかった現実とは何だったのか。病気か、飢えか、お上の横暴への憤りか、にっちもさっちもいかなかった現実を受け入れるための儀式なのか。

それらのこたえをあくまでも個々の儼戯の場に密着して身体演戯や台詞のなから取り出していくこと、それはかなり高いレベルの要求であるが、著者のこれまでの旺盛な実践力をもってすれば、十分、可能なこととおもわれる。5章の終わりで著者は儼戯がどういう順序で進められるのか、どういう道具を用いるのか、いかなる呪術があるのかといった「紹介」にいきつしたが、それは整地作業が済んだということであり、さて今から出発すべきではなからうか。